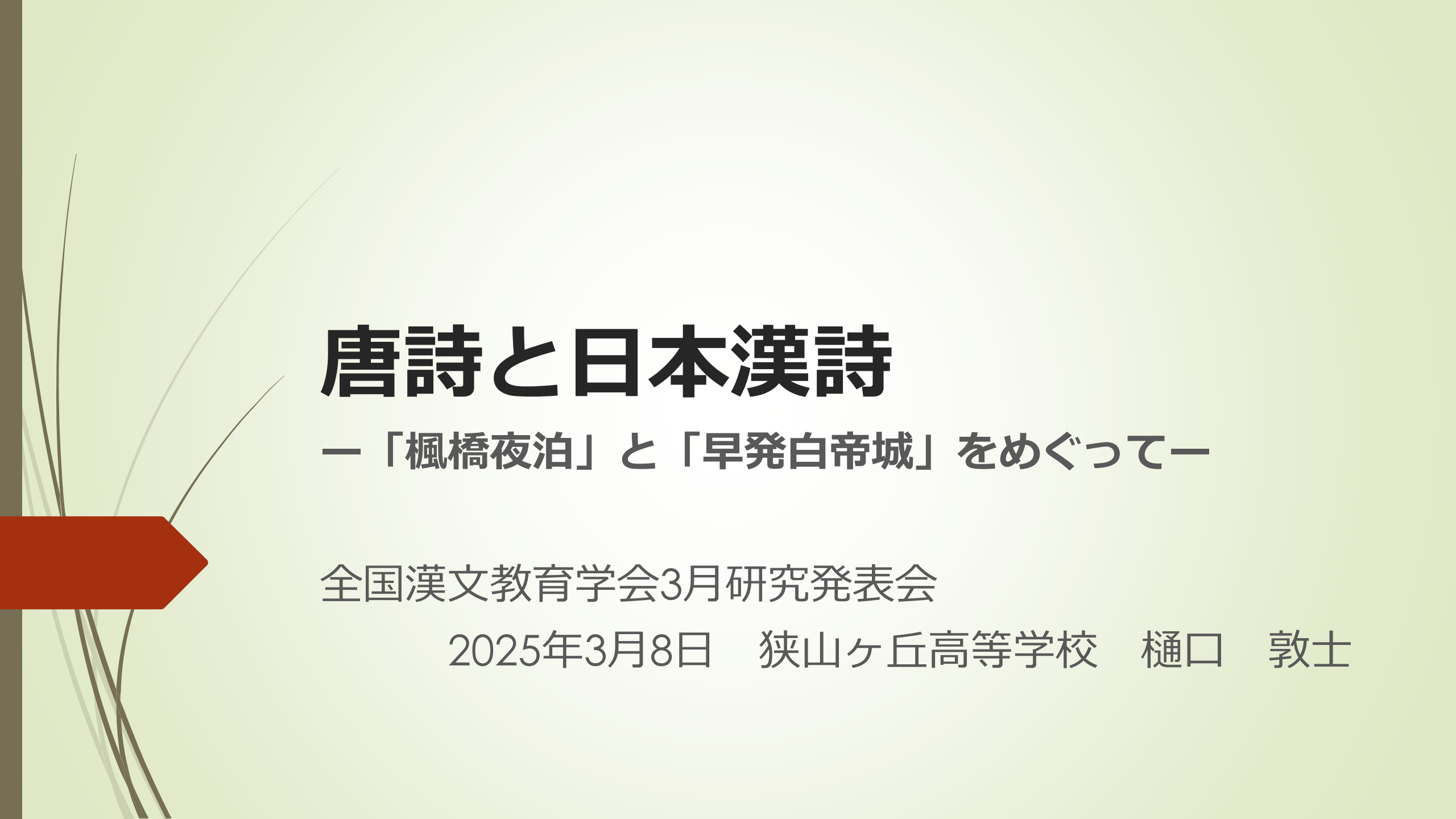




唐詩と日本漢詩

—「楓橋夜泊」と「早発白帝城」をめぐって—

全国漢文教育学会3月研究発表会

2025年3月8日 狭山ヶ丘高等学校 樋口 敦士

発表者自己紹介



狭山ヶ丘高等学校教諭。専門は漢文教育。学生時代は近世（江戸）文学を専攻していたが、教職に就いてからは国語教育に照らした漢文教育の研究につとめる。これまで多くの教材や問題集の執筆にも携わる一方で、勤務校では有志の生徒に漢詩創作指導にも取り組む。伊藤園おーいお茶新俳句大賞ユニーク賞や諸橋轍次博士記念全国漢詩大会秀作賞受賞。共著には『あらすじで読む日本の古典』（中経出版・新人物往来社）、『古典「漢文」の教材研究』（学文社）、単著には『故事成語教材考』（文学通信）がある。 （写真は昨年10月の全日本漢詩大会神奈川大会の様子）

樋口敦士（通文享）

漢詩作品 「天橋立」

淮陰窺胯拝雲峰

和媛嘗称磯水蹤

万緑薰風吹碧海

孤洲清境映飛龍

淮陰胯を窺ひ 雲峰を拝す

和媛嘗て称ふ 磯水の蹤

万緑の薰風 碧海に吹き

孤洲の清境 飛龍を映ず

【押韻】

上平声二冬（峰・蹤・龍）

【通釈】

淮陰侯韓信が「胯くぐり」をしたように「股のぞき」をして夏の入道雲を拝む。和泉式部がかつてこの地の名水「磯清水」を称えたことでも有名である。万緑の南風が青い日本海の宮津湾に吹き込み、「天橋立」の清らかなたたずまいが一頭の飛龍を映し出している。



日本漢詩とは…日本人が作った漢詩のこと。
(学習指導要領には「日本漢詩→漢詩創作」)

平成元年（一九八九）三月告示『高等学校学習指導要領国語』

教材には、日本漢文も含めるよう留意する。また、必要に応じて近代以降の文語文や漢詩文などを用いることができる。（古典Ⅰ「内容」）

平成三十年（二〇一八）三月告示『高等学校学習指導要領国語』

古典を読み、その語彙や表現の技法などを参考にして、和歌や俳諧、漢詩を創作したり、体験したことや感じたことを文語で書いたりする活動。

（古典探究「内容」）

日本漢詩についての意識

■ 二松学舎大学教授 牧角悦子氏

中国学・中国文学の研究者は、従来、日本漢詩の分野にはあまり注意を払ってきませんでした。それは、漢詩は中国が本場なのだから、日本人の作った漢詩などは亜流だという固定観念が強かったからです。実際、私自身も、中国の古典を専門としていると、日本の漢詩への興味はほとんど湧かなかったというのが正直なところです。

（『日本漢文学研究』第八号 2013年3月）

漢詩指導について

①唐詩鑑賞指導

現代に至るまで疑義を持たれることなく連綿と重点が置かれ続けた。

②日本漢詩指導

戦前まで漢文教科書中に数多く採録されたものの、戦後には教材観の変化により大きくその数を減らした。平成以降の学習指導要領については重点が置かれた。

③漢詩創作指導

漢詩創作指導は近代教育以降の学校教育からは外されて、現代になって改めて見直されている。現行の学習指導要領にはこの点が明記されている。



張繼「楓橋夜泊」とその翻案詩

—中世・近世・近代における受容状況—

張繼「楓橋夜泊」 （『三体詩』 『唐詩選』）

●	姑	○	江	○	月	●
●	蘇	○	楓	○	落	●
○	城	○	漁	○	烏	○
○	外	●	火	●	啼	○
●	寒	○	對	●	霜	○
●	山	○	愁	○	滿	●
◎	寺	●	眠	◎	天	◎

夜半鐘聲到客船

月落ち烏啼きて霜天に満つ

江楓漁火愁眠に對す

姑蘇城外の寒山寺

夜半の鐘聲客船に到る

【形式】七言絶句／【押韻】下平声一先◎
(天・眠・船)

蘇州楓橋を訪ねた作者は月が落ち烏が鳴いて、霜が立ちのぼる感覚の中で夜陰に映る長江沿岸の紅楓や漁火の色彩によりなかなか寝つけない。夜半の寒山寺の鐘を聴きながら、旅愁を覚える詩情が溢れる。

（南宋）陸游「宿楓橋」（『劔南詩稿』）

七年不到楓橋寺

客枕依然半夜鐘

風月未須輕感慨

巴山此去尚千重

七年到らず楓橋寺

客枕依然として半夜の鐘

風月未だ須ひず軽がろしく感慨するを

巴山此れより去ること尚ほ千重

【押韻】鐘・重（上平声二冬）

【詩意】

乾道六年（一一七〇）六月十日、任地の夔州に赴く途中、七年ぶりに訪れた蘇州泊の詩。結句には目的地の四川省巴山までの距離を詠み込んでいる。このときの記録は紀行文『入蜀記』に詳しい。

（明代）高啓「楓橋」（『高青丘詩集』）

画橋三百映江城

詩裏楓橋独有名

幾度經過憶張繼

烏啼月落又鐘声

画橋三百江城に映ず

詩裏の楓橋独り名有り

幾度か經過して張繼を憶ふ

烏啼き月落ち又鐘声

【押韻】城・名・声（下平声八庚）

*画橋：美しい橋。

【詩意】蘇州には美しい橋が連なるが、楓橋のみは名詩に詠まれてとりわけ有名である。張繼が目にした当日の夜景を思い出す。高啓は「東歸至楓橋」、「楓橋送丁鳳」、「閶門舟中逢白範」など楓橋にまつわる漢詩を多く詠む。

義堂周信「楓橋夜泊図」（『空華集』）

曾読楓橋夜泊詩

画図今見墨淋漓

張公去後無人和

夜半鐘声聴者誰

曾て読む楓橋夜泊の詩

画図今見れば墨淋漓たる

張公去りて後人の和する無し

夜半の鐘声聴く者は誰ぞ

【押韻】詩・滴・誰（上平声四支）

【詩意】作者は土佐高岡出身の臨済僧。夢窓疎石に師事。水墨画「楓橋夜泊図」を目の当たりにしながら詠んだ漢詩。張継が立ち去った後はその詩情を受け継いで唱和する者はおらず、夜半の鐘声を聴く者は一体誰なのか知らないと言む。



一休宗純「遠寺晚鐘」（『狂雲集』）

不識鐘声何処山

寺隣万里白雲間

夢冷姑蘇城外客

楓橋月落宿星湾

識らず鐘声何処の山なるか

寺隣万里白雲の間

夢は冷やかなり姑蘇城外の客

楓橋月落つ星を宿す湾

【押韻】山・間・湾（上平声十五刪）

【詩意】作者は京都出身の大徳寺派の臨濟僧。「一休ばなし」で有名。「瀟湘八景」詩の一つ「煙寺晚鐘」の画賛。どこか遠くの山から晚鐘が聞こえ、姑蘇城外の旅人の夢は冷めて「楓橋」の月は落ちるが、星が湾を映し出す詩情が醸し出されている。



策彦周良「楓橋」（『南遊稿』）

楓橋未断僅看蹤

人物難逢境易逢

張繼去来無宿客

旧時山答旧時鐘

楓橋未だ断たず僅かに蹤を見る

人物逢ひ難く境逢ひ易し

張繼去来して宿客無し

旧時の山答ふ旧時の鐘

【押韻】蹤・逢・鐘（上平声二冬）

【詩意】作者は丹波出身の臨濟僧。嘉靖七年（一五二八）十一月に蘇州寒山寺の鐘楼を訪ねており、張繼が立ち去った後には詩情を解する客などなく、当地にはありし日の風景が僅かに漂っているのみと詠み込む。

玉質宗樸「三井晩鐘」（『黔驢集』）

湖面朦朧画不成

昏鯨高響出園城

霞間好是客船月

十倍楓橋半夜声

湖面朦朧として画けども成らず

昏鯨高く響きて園城より出づ

霞間は好し是れ客船の月

十倍の楓橋半夜の声

【押韻】成・城・声（下平声八庚）【詩意】
作者は相国寺長老。慶安二年（一六四九）に
詠まれた「江州八景」の一つ。琵琶湖水が朦
朧として描くことができないとし、三井寺
（園城寺）の晩鐘風景を描写しながら、蘇州
「楓橋」の地との比較を試みたものである。



梁川星巖「壇浦雜詠」（『星巖集』）

香衾才煖又開錨

別後憑誰風一條

月落烏啼鎖窓曉

悠揚吹夢到楓橋



香衾才に煖めて又錨を開く

別後誰に憑りて風一條

月落ち烏啼きて窓を鎖す曉

悠揚夢を吹きて楓橋に到る

【押韻】錨・条・橋（下平声二蕭）

*香衾：香りのある寝具。

【詩意】作者は美濃出身の漢詩人。長門壇浦で明け方、出航する夫を見送った際に、風に頼ってかの「楓橋」まで寄り添いたいという女性の気持ちを詠み込む。

役浄淵「品川即事」（『宜園百家詩』）

緑酒紅灯鬧管弦

乱櫓影雜月難円

間人独結楓橋夢

到枕鐘声是品川

緑酒紅灯管弦を鬧し

乱櫓の影雜にして月は円なり難し

間人独り結ぶ楓橋の夢

枕に到る鐘声是れ品川

【押韻】弦・円・川（下平声一先）

*緑酒紅灯：美酒と歡樂街。

【詩意】作者は豊前彦山の修験者で広瀬淡窓門下。月さえもまともに見られない酩酊状態の中で、品川に着くと鐘の音で起こされる。小舟で廻る品川界隈の賑わいの様子。



副島種臣「楓橋」（『蒼海全集』）

月落烏啼霜滿天

楓橋夜泊轉淒然

兵戈破却寒山寺

無復鐘聲到客船

月落ち烏啼いて霜天に満ち

楓橋夜泊轉た淒然

兵戈破却す寒山寺

復た鐘聲の客船に到ること無し

【押韻】天・然・船（下平声一先）

【詩意】作者は肥前佐賀出身の外交官。明治九年（一八七六）九月、外務卿を辞した作者は清国漫遊の旅に出かけ、各地の名所を巡る。転句・結句からは破壊された寒山寺の痛々しい様子からは鐘声も聞こえないとする。寒山寺は幾度か消失しているが、近いところでは咸豐十年（一八六〇）の太平天国の乱を起こした長髮賊によって破壊され、光緒三十二年（一九〇六）に新たな鐘の取りつけがなされ、宣統三年（一九一一）の寺院再建に至るまで、常に日本人の関心を惹いていた。

長岡護美「丁抹城外夜泊」 （『海外観風詩集』）

漁火滅波陰霧重

孤舟泊処月朦朧

羈愁忽聴丁城角

却似寒山寺裡鐘

漁火は波に滅して陰霧重し

孤舟泊る処月朦朧

羈愁忽ちに聴く丁城の角

却りて寒山寺裡の鐘に似たり

【押韻】重・朧・鐘（上平声二冬）

【詩意】作者は肥後熊本出身の外交官。

明治十三年（一八八〇）頃、デンマーク（丁抹）赴任の際に詠んだもの。ある港町にて宿泊し、朧月のもとに漁火や孤舟を目にしながら教会の鐘の音に遥か東方の寒山寺の鐘声を覚えている。

永井禾原「過寒山寺」（『来青閣集』）

古寺尋秋步履遲

殘鐘響斷夕陽悲

幾經兵劫碑全壞

難読楓橋夜泊詩

古寺に秋を尋ね步履遅く

残鐘の響き断ちて夕陽悲し

幾たびか兵劫を経て碑全く壊れ

読み難し楓橋夜泊の詩

【押韻】遅・悲・詩（上平声四支）

*步履：下駄。

【詩意】作者は尾張名古屋出身の外交官。明治三十四年（一九〇一）八月に清国を再訪した作者は寒山寺の荒廃した様子を悲しみ、「楓橋夜泊」の詩情とはほど遠いと嘆じている。作家永井荷風の父親に当たる。

渋沢栄一「寒山寺」（『禹域詩紀』）

船到楓橋曙色明

姑蘇城外雨初晴

新鐘補古寒山寺

一杵先聞夜半声

船は楓橋に到りて曙色明く

姑蘇の城外雨初めて晴る

新鐘古を補ふ寒山寺

一杵先づ聞く夜半の声

【押韻】明・晴・声（下平声八庚）

【詩意】作者は武蔵榛沢（現深谷市）出身の実業家。大正三年（一九一四）五月九日の午前中の雨後の絶景の中で、小舟で運河を渡り寒山寺を訪れ、備えつけられたばかりの新鐘を目にして晴れやかな漢詩を詠んだことがわかる。



わが国における「楓橋夜泊」翻案詩

中世（鎌倉・室町五山僧）⇒寺院から捉えた風景 **聴覚的**

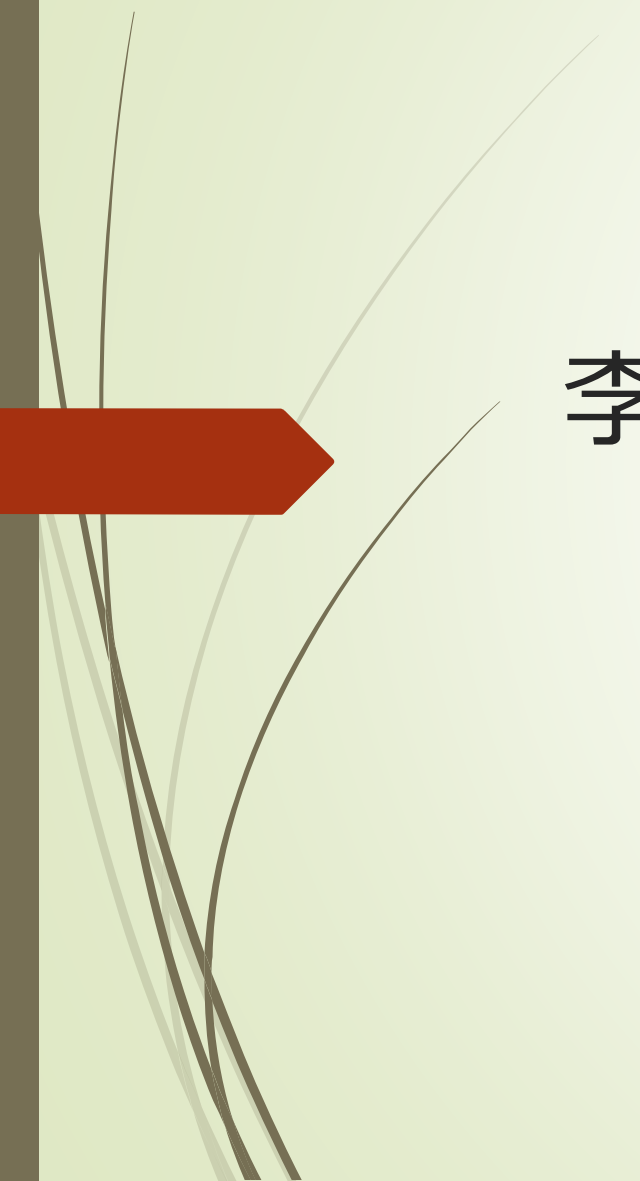


近世（江戸漢詩人）⇒各地の名所における旅景 **視覚的**



近代（明治外交官）⇒清国における実景 **懐古的**

（月落ち烏啼きて的書生）



李白「早発白帝城」とその翻案詩

ー尾張犬山城と木曾川ー

李白「早発白帝城」（『唐詩選』）

朝	○	辞	○	白	●	帝	●	彩	●	雲	○	間	◎
千	○	里	●	江	○	陵	○	一	●	日	●	還	◎
兩	●	岸	●	猿	○	声	○	啼	○	不	●	住	●
輕	○	舟	○	已	●	過	●	万	●	重	○	山	◎

朝に辞す白帝彩雲の間

千里の江陵一日にして還る

兩岸の猿声啼いて住まざるに

輕舟已に過ぐ万重の山

【形式】七言絶句

【押韻】間・還・山（上平声十五刪）

早朝白帝城を出発して長江の三峡を下って江陵まで到着した内容。兩岸に群れをなした猿の鳴き声はやむことなく舟がいくつもの山を越えていく爽快感が詠み込まれる。

杜甫「秋興八首其一」 （『杜律七言集解』）

玉露凋傷楓樹林
巫山巫峽氣蕭森
江間波浪兼天湧
塞上風雲接地陰
叢菊兩開他日淚
孤舟一繫故園心
寒衣处处催刀尺
白帝城高急暮砧

玉露凋傷す楓樹の林
巫山巫峽氣蕭森

江間の波浪は天を兼ねて湧き
塞上の風雲は地に接して陰る
叢菊兩たび開く他日の涙
孤舟一たび繫ぐ故園の心
寒衣处处刀尺を催し
白帝城高うして暮砧急なり

【形式】 七言律詩

【押韻】 下平声十二侵（林・森・陰・心・砧）

【詩意】 巫山巫峽のあたりに秋氣満ち、長江の激浪や砦上の風雲は日を陰らせる。成都を放たれてより菊花は二度開き、世をはかなんで涙は止まず、流れ漂う孤舟である私（作者）を繋ぐのは望郷の心のみ。冬支度を整える時節となり、白帝城のもとで夕刻になると砧を打つ音がせわしく心をかき乱すのである。

松平君山「擬上白帝城」（『弊帚集』）

一從踊馬倚崔嵬
千古孤城煙外開
天末浮雲空自在
中原秋色為誰來
瞿塘返照隨行慢
赤甲晴嵐落酒盃
試向最高樓上望
可堪暮雨擁荊台

一たび馬を踊らせて崔嵬に寄りしより
千古の孤城煙外に開く
天末の浮雲空しく自ら在り
中原の秋色誰が為に來たる
瞿塘の返照行慢に随ひ
赤甲の晴嵐酒盃に落つ
試みに最高樓上に向かひて望めば
堪ふべけんや暮雨荊台を擁するを

【押韻】上平声十灰（嵬・開・來・盃・台）
*荊台：長江北岸の景勝地。

【詩意】作者は尾張藩士。馬を馳せて高所から見ると、太古の孤城から霞は外に漂っている。天の果てに浮雲は空しく存在して中原の秋の気配は誰のために來たのか。瞿塘峡の夕日はわが歩みに従い、赤甲山の晴れた霞が盃の中に落ちた。試みに白帝城の最高樓を見上げると、夕暮れの雨が荊台を包み込んだ景色を見るに忍びがたい。

亀井南溟「巫山高」（『宜園百家詩』）

峰峰十二鬱崢嶸
搖落西風万木鳴
神女啼粧為雨散
襄王痴夢与雲行
九疑残月蒼梧野
三峽狂濤白帝城
千里悲秋南竄客
断腸非管夜猿声

峰峰十二鬱崢嶸たり
搖落西風に万木鳴り
神女の啼粧雨の為に散り
襄王の痴夢雲と与に行く
九疑の残月蒼梧の野
三峽の狂濤白帝城
千里秋に悲しむ南竄の客
断腸夜猿の声に管するに非ず

【押韻】下平声八庚（嶸・鳴・行・城・声）
【詩意】作者は筑前福岡出身の儒学者。
巫山高の十二峰は険しく、秋風が葉を揺
れ落として万木が鳴る。巫山の神女の泣
化粧は雨に散り、楚の襄王の痴夢は雲と
ともに流れていく。九疑山の残月は蒼梧
の野にあり、三峽の狂濤は白帝城にある
千里の秋に驚く左遷された客は断腸の思
いは夜猿の声と関わるものではない。

志賀重昂「犬山即事（題犬山）」

（「中央新聞」大正二年〈一九一三〉七月十九日）

千里江陵一日還

萊因夕照絶人間

東人漫誦西人句

咫尺無佗説**犬山**

千里の江陵一日して還る

萊因の夕照人間に絶す

東人漫誦す西人の句

咫尺佗無く犬山を説く

No where sunset in the world, but on
the Rhine.

是は漢学者と申す日本出来て以来のハイカラなる一団有之。支那と申せば何んでも工ラク又有難しと思ひ李白の句を取り犬山を白帝城と命じ白帝城が三峽の險の起る所に於て犬山が木曾川の平流となる点と正反對なるを知らず。又白帝城が唐の頃にてすら存在の疑はしきことを知らず。又「江陵」は地名にして揚子江流にあらざることを知らず。李白の句を誤読して犬山を白帝城と呼做さしめ犬山に到れば白帝館あり。白帝園あり。白帝台あり。小生は此誤を正さん為め右の悪詩を賦し申候。日本にてハイカラの骨頂と申せば漢学者漢文人に有之。夫れにて洋学生を目しハイカラなど呼ぶは臍が茶を湧かす次第に御座候。

【押韻】上平声十五刪（還・間・山）

鈴木虎雄「舟中望犬山城」 （『豹軒詩抄』）

峽尽江開秋水平

扁舟如葉信流行

西望鴻影低煙樹

天際高高白帝城

峽尽き江開きて秋水平かにして

扁舟葉のごとく信に流れ行く

西のかた鴻影を望めば煙樹低れ

天際高高なり白帝城

【押韻】下平声八庚（平・行・城）

【詩意】昭和十年（一九三五）十月の作。作者は新潟県出身の漢文学者。谷川は尽きて江が開け、舟は葉のよう
に流れていく。西方のオオトリの影を見上げるともやがかった木々が低くあり、天の果て高く白帝城が聳えている。



加藤晦堂「題旧郷白帝城下曾川行舟図」 (『晦堂集』)

風送白帆烟水鮮

犬山城下木曾川

画中空逐少時夢

一去不歸五十年

風送る白帆烟水鮮かに

犬山城下木曾の川

画中空しく逐ふ少時の夢

一たび去りて帰らず五十年

【押韻】下平声一先（鮮・川・年）

【詩意】昭和十二年（一九三七）の作。作者は尾張犬山出身の臨済僧であり、幼少期に長野県に移住し、その後は京都で禅学を学んだ。白帆が風に吹かれてもやががった水面は鮮やかである。犬山城下の木曾川下りの絵に五十年前の幼少期の自身を思い浮かべる。ちなみに作者は三年後の昭和十五年（一九四〇）に享年六十歳にて遷化する。



樋口敦士（通文享） 「犬山白帝城」

清明時節彩雲晴

濃尾蘇川白帝城

日本萊茵勝景地

孤舟已遶爽涼声

清明の時節彩雲晴れ

濃尾の蘇川白帝城

日本萊茵の勝景の地

孤舟已に遶りて爽涼の声

【押韻】下平声八庚（*清・*明・晴・
城・声） *清明：四月の上旬。春休み。
【詩意】清明の時節、明け方の雲が晴
れて、濃尾平野の木曾川（蘇川）や白
帝城がはつきりと見える。ここはかつ
て「日本ライン」と呼ばれた勝景の地
であり、遊覧船は早くも一巡して乗客
たちの爽涼の声が聞こえてくる。



わが国における「白帝城」翻案詩

江戸・明治⇒享保年間（犬山城を「白帝城」と命名）

杜甫詩（七言律詩）**眺め** > 李白詩（七言絶句）**流れ**

* 必ずしも犬山城と木曾川を詠んだものではない

大正⇒志賀重昂「日本ライン」の名称

李白詩（七言絶句）**流れ** ⇒ 主流に

まとめとして

中国由来の漢詩は日本でどのように受容されてきたかの研究はこれまであまりなされてこなかった。ただ、受容史を知ることが国語教材としての意味を持つことになる。唐詩を単に鑑賞するのみならず、表現の一つとして理解することがこれからの古典教育には重要であると考えられる。

【参考文献】

○拙稿「漢詩「楓橋夜泊」教材考—日本漢詩に与えた影響を踏まえて—」

（『早稲田大学国語教育研究』第44集 2024年3月）

○拙稿「漢詩「早発白帝城」教材考—郷土漢詩教材としての視点に着目して—」

（『国語探究』第5号 2024年9月）

本日はご清聴ありがとうございました。